

御所まち

伝建通信

第6回

かんこう せわりげすい
環濠と背割下水

文化財課 画60・1608

御所まちが、江戸時代の初頭に畿内の寺内町をモデルにして環濠に囲まれた町場として整備されたことは、これまで述べてきたとおりです。環濠の幅は5尺(約1.5m)で、環濠の内側には幅3尺(約90cm)の土塁が設けられました。現在この土塁を見ることはできませんが、昭和20年代には、東御所の東端の一部に残っていたようです。東御所の西端や東御所の円照寺西側には、今でも石積み

の環濠が良好な状態で残されています。町場の内部では、道路の整備と同時に、町屋から出る生活用水や雨水を排水するための下水溝が設けられました。道に囲まれた街区の中央に下水溝を通すことで、排水と同時に敷地を分ける役割を果たしていたことから、「背割下水」と呼ばれました。天正11年(1583)の、豊臣秀吉による大坂城築城に伴うまちづくりでも背割下水を利用した整備が行われ、太閤秀吉にちなんで「太閤下水」と呼ばれています。御所まちは豊臣系の家臣であった桑山氏によって整備されているので、大坂城と同類の下水溝が設けられたのでしょう。

環濠や背割下水の多くは、現在も建設当初のままの場所に残されています。今では、コンクリートで固められてしまったものも多くなりましたが、石積みが残されている部分では、さまざまな技法を見ることが出来ます。これらの石積みを保存することは大変手間のかかることで、住民のみさんの長年の努力のたまものです。平成20年には、その保存活動が国土交通大臣賞「循環のみち下水道賞」を受賞しました。

種類別の石積み位置図



のづらづみ めのづみ
野面積み (布積) の環濠

自然の石を加工せずに積む方法。丸みのある石が多く、石同士の間が大きく開いている。

JRの築堤下など、明治以降に積み直された可能性のある場所に多い。



うちこみはぎ らんづみ
打ち込接 (乱積) の環濠

石同士の接合部を加工し、すき間を減らしたもの。

御所まちでは広く用いられており、成立当初の技法であったと考えられる。背割下水では布積のものが多い。



きりこみはぎ
切込接 (布積) の環濠

石の表面を徹底的に加工し、すき間を無くしたもの。

建設当初に重要視された寺内町や代官町に見られる高度な技法で、後世の積み直しの可能性もある。